

援助職のリカバリー

《23》

～「セックスレス」に立ち向かう(4)～

袴田 洋子

二月初め、担当していた末期がん患者の克彦が亡くなった。がん患者は、最期の一か月の間に、急激に状態が悪化すると言われているが、克彦の場合は、やや様子が違った。がんが脊髄に転移していたことにより、脊髄損傷を起こし、京子が訪問するようになって間もなく、寝たきり状態になっていたからである。薬を克彦の自宅に届けた際に、一度だけ、ヘルパーの食事介助の時間と重なった時があった。ヘルパーから、本人が痛みを訴えることは、ほとんどなくなったと聞き、京子は、ほっとした。末期がん患者の疼痛コントロールは、生活の質を大きく左右する。在宅診療をしている主治医の処方がかうまくいっているのだと思った。

「痛みのお話はあまりおっしゃらないけれど、ご家族とはほとんどお話しされないようで、それがちょっと私たちは気になっています。いろいろ事

情があるのでしょね」とヘルパーは、京子に教えてくれた。京子は、長男に初めて会った時のことを思い出した。やはり、ヘルパーの方たちも、家族のことが気になっているのだ。間もなく、克彦の人生は、終わる。そのことを、家族たちは、きちんと理解しているのだろうか、京子は気がかりだった。

がんによる痛みを軽減するために、緩和治療として麻薬も飲むようになってから、克彦は眠る時間が増えていった。その表情は常に穏やかであり、徐々に、徐々に、食事摂取量は減っていき、最期は高熱を出して、ほぼ眠っている中での旅立ちだったと、担当のケアマネジャーから聞いた。いつも丁寧に京子に挨拶の言葉をくれた克彦の顔を思い出しながら、気になっていた長男のことを訊いてみた。「同情しないでください」と初めて会った時に言われてから、長男とは一度も会わな

いままに、克彦への訪問は終わってしまっていた。

ケアマネジャーは、克彦の家族について、詳細に教えてくれた。現役の頃の克彦の仕事のこと、先に亡くなった妻のこと、親しい友人のこと、地方に嫁いでいる長女のこと、経済的な問題があること、そして、長男家族が、克彦の部屋にほとんど出入りしていなかったその理由のようなものを聞きながら、京子は、点と点が結ばれていくような感覚になった。「本当に、自分が薬剤師として関わる時間など、その人の人生の中では、ほんのわずかでしかないんだ。通りすがりの援助者に過ぎないのだ」と思った。

克彦に薬を届けている中でただひとつ、京子は、自分自身の勝手な期待があることに気づいていた。克彦には、同居している孫が二人いる。その孫たちのために、長男の妻に、克彦にもう少し関わってもらいたいという、願いに近いような思いだった。子どもは親のことをよく見ているものだ。祖父のことを、自分の母親はどんなふうに最期、世話をしたのか、しなかったのか。「さんざんな思いをさせられたけれども、死ぬ最期の時は、ちょっとだけ、お母さんは、ちゃんとおじいちゃんの世話をした」というフレームは、子どもたちにとって、無いよりはあった方がきつといい。それが、京子が克

彦の家を訪問しながら、ずっと抱えていた「気がかり」だった。が、結果として、担当ケアマネジャーの話を聞きながら、最後まで京子の期待していたフレームは、作られなかったことがわかった。甘ったるいような残念感を自覚しながら、京子はある鮮明な課題を自覚した。亡くなった患者家族の話であるはずなのに、夫である弘明と京子の、自分たち夫婦の問題として見えてきてしまったからだった。

親が末期がんで亡くなるという状況になっても、夫婦や家族の親密性が高まらない。子どもがいても、夫の親の看取りという時期になっても、妻がケアに参加しようとしめない。これまでにみてきた患者家族とは、ずいぶん違う。が、そんなような状態になるのは、それなりの理由があるからだろう。最期の世話くらいしなければ、などとも思えないような夫婦関係だった、ということだ。さみしいと思った。でも、他人のことをそんなふうに見えるのだろうか。自分たち夫婦はどうだろう。何をもって、親密だ、と言えるのだろうか。子どもを持たず、夫婦ともに働き、お互い、自分の好きなことしかしていない、という見方もできる。いったい、何のために二人で暮らしているのだろうか。更年期障害のせいなのか、最近、妙に性欲を感じる。仕事のストレスもあるだろうが、性的なものを想像

することが増えているように感じた。
でも、20年近くもセックスレスなのに、今更、弘明に何と言っていいのかわからない。克彦の家族の歴史を考えていたのに、いつの間にか、自分たち夫婦のことで、頭の中がいっぱいになってきてしまった。

自宅に戻り、洗濯物を取り込んだ後、京子は、食事もそこそこにパソコンを立ち上げ、Googleに「セックスレス」と検索ワードを入力した。